

---

# ストロボ

柏木一木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストロボ

### 【Nコード】

N15870

### 【作者名】

柏木一木

### 【あらすじ】

僕がミシンを手に入れたのは、なんてことはない、自分だけの服が欲しかったからだ。もちろん、最初から満足できるものができるとは思っていないし、そもそも、すぐに飽きると思っていた。でも、「もしかしたら」と思ってペダルを踏み続けたら、たくさんの服ができあがっていた。捨てるのは忍びないけど、このままでは部屋が埋まってしまう。そう思ってフリーマーケットに出展することにした。そこで、サイケデリックでパンキッシュな彼女と出会った。僕が服を売って、彼女が服を買う。ちょっとした会話があったけど、

あくまでそれだけの関係。でも、偶然というのはあるらしい。また  
彼女と出会ってしまった。

四畳半の部屋。

団地に暮らしていた僕が、子供部屋と称して兄と一緒に使っていた部屋の広さだ。

だけど、二人だからといって、そのまま綺麗に二等分されるといっうわけではなかった。

兄とは七歳も離れていた。

この七年という時間は大きい。あとから生まれしてきた僕が物心をつく頃には、兄の使いやすいうように部屋の間取りは作り替えられていた。

僕の立場といえば、日本に働きに来た海外労働者のようなものだ。勉強机や本棚は使わせて頂くという謙ったものでしかなく、自分のスペースといえるのは二段ベッドの上部だけ。

僕はそれでも構わなかった。

だけど、一つだけ許容できないことがある。

うちの家は経済的に苦しかったわけではなかったけど、あるもので済ませる生活をしていた。そのため、僕の周りにある物は兄からのお下がり。つまり、僕が着ている服は何年も前の流行物ばかりだ。兄は服装に関して無頓着であったから、格好悪いものがいつも僕に流れてくる。

親に文句を言っても世代が違えばセンスや考え方も違う。判ってくれなかった。

歳を重ねるに連れて不満が大きくなり、兄がいなくなればいいと神様に祈ったけど、どうやら僕の願い事を叶える気はないらしい。それとも、神様は死んでしまったのだろうか。それとも不公平なのか。

僕が大学受験をする頃には、兄は大学を卒業し、不況といえど就

職をしていたはずだった。しかし、内定を一つすら貰えず、流行のフリーターとなって家に居着いている。真つ当にアルバイトをしていけばいいものを、ことある毎に店長やバイト仲間と喧嘩して、今は家でダラダラしている。

いつまで経っても、四畳半の部屋には僕の居場所がない。

そんな僕が大学を選ぶ規準として自宅通学ができないくらい遠く、それでいて文句のない大学を選んだのは場所を選んだのは当然ななりゆきだった。

参考書とシャープペンシルを持って、勉強を勤しんだ。そんな努力のかがあったのか、第一志望は色気を出しすぎて失敗はしたけど、とある大学に進学することが決まった。

そのことを踏まえて、一人暮らしをしたいという意見と、それに合わせたプランを提出して説得をした。初めは反対をされるかと思っただけど、「いいんじゃないの」と簡単に肯定されて、少しだけ肩透かしに感じた。でも、嬉しかった。

四畳半から一気にグレードアップして、フローリングされた九畳の板間にこの春からは住むことが決まった。

実際に一人で暮らすとなると、いろいろな物が必要になってくるのは判っていたけど、いまひとつ何が必要で何が不必要なのか判らなかつたので、卒業する前、高校のコンピューター室に潜りこみ、インターネットで調べてみることにした。

その結果、洗濯機はコインランドリーが近くにあれば十分、調味料はしょう油と塩の二つでそれなりの物は作れるなど、エトセトラ。今まで必要だと思っていたものは、あるならばそれに越したことはない程度の、大して必要でないことを知った。

今まで、物に対して欲しいという願望はあつたけれど、無駄な物をあえて手に入れるまでは至らなかつた。そうした結果、新しい部屋には閑散としたものとなつた。

テレビとテーブルくらいしか、目を引く物がない部屋の中で、たった一つ自分のワガママを通したものがある。

それはミシンだ。

招き入れない限り見られることのない部屋ならば、例え汚かろうが気にすることはないだろう。だけど、僕という個人は外を歩けば、他人の目に晒される。勿論、それなりの恰好をしていれば、ドラマで言うところの通行人Aのように気に留めることはないだろう。

その事は判つていても、今まで兄の着ていた洋服を着せられていたので、僕が僕ではなく、兄の使い捨てられた皮を被った人間のよくな錯覚を抱いていた。

虎の威を借る狐ではなく、就職もせず家に安穩としている駄目な兄の皮を被った自分。それを払拭しなかった。

中学、高校時代は制服を着用が義務づけられていたのは有り難かった。

制服ならばみんな恰好だから、自分の格好悪いところを見せずにいられた。たまに、友達を遊ぶことはあったけど、学校帰りである以外、なるべく付き合わないようにした。劣等感を抱くのがいやだったからだ。

中学校のころから、その事を抱いていて、コンビニでファッション雑誌を立ち読みしては、空想を巡らせるようになっていた。そのせいで、ブランド志向が強くなっていったのが問題なのかもしれない。頭では判つていても、欲しいのはやっぱりブランド品で、関心はそこに集中した。しかし、欲しいと思う洋服は、とても値が張る。もちろん、デザインもさることながら、裏地の部分から、普通見ないところまで目を配り、きちんとした作りであるから、それに対して高い値段がつくの当然である。ただ、それを実際に買うとなると問題だ。

アルバイトをすることは決めているのだけど、まだ何処にするかは決めていない。

せっかく大学に進学したのだから、勉強の邪魔にならない程度のアルバイトを選んだとすると、週四日で、一日五時間くらいでき

ば僥倖だろう。そこから、払われる賃金を考えると、上下を合わせ  
た服を買ってスツカラカン。いくら何でもこれは酷かった。勿論、  
毎月毎月服を買うわけではないのだろうけど、僕は自分だけの服が  
欲しかった。

丁度、母親方の親戚が使わなくなった古い家庭用のミシンがある  
ことを聞いて、譲り渡してくれないかと訊ねた。初めは男が、それ  
も一人暮らしをする人間に不要だからといって断られた。それで  
も頼み込むと、要らなくなったら一言いつてくれ、と折れてくれて、  
僕はミシンを手に入れた。

その時、先を見通してミシンを手に入れた訳ではなかった。いわ  
ばマスターベーションのようなもので、自分の望む服が作れるかも  
しれないという、自己満足でしかなかった。

それでも、かもしれない、という可能性が僕を突き動かし、講義  
とアルバイトの合間を縫って、ミシンのペダルを踏んだ。

それまで、洋服を作るということを家庭科の時間以外にしていな  
かったのと、決して器用な人間で無かった僕の第一作となる作品は、  
型紙を無視した、見るに耐えない布きれの継ぎ合わせができあがっ  
た。それで作るのを止めようかと思っただけど、かもしれない、がち  
らちらと頭を過ぎり、ペダルを踏むことを止めることはなかった。

何が悪かったのかを試行錯誤をくり返していくうちに、型どおり  
に作れるようになっていた。

ここまで来ると、作るのが楽しくていって、安物の服を買ってき  
ては模様を付け加えるなどのリメイクをしたり、時にはバラバラに  
寸断して、一から作り替えたりするようになった。

気に入ったものは、それを着て大学へ通学した。少し恥ずかしい  
思いながらも、今までと違って、自分ということを実感していた。

この頃になると、ブランド品は自分の作品を作るための手本でし  
かなくなっていた。初めから、被服系の大学に行けばよかったと思  
い始めていたけど、その時はここまで洋服を作ることにのめり込む

なんてことを考えられるわけがなかった。あくまで趣味と決めて、休日に布問屋を回って楽しむことにした。

人暮らしを初めて一年経ち、部屋の物の少なさは相変わらずだったけど、様相は一変していた。家庭用ミシンの他に、ロックミシンとカバーステッチミシンの二つほど増え、作った服も押入に入らなくなり、部屋の隅に積み重なっている。昔の作品は手を入れるなどをして増えないようにしているのだけど、さすがに作りすぎていた。このままでは捨てるしかないなと思ったが、自分の子どものようにそれは忍びなく感じ、考えた末にフリーマーケットで売ることに決めた。

出展届けもきちんと出して、あとは売るだけとなったが、自分の作品が評価されるのだろうか、素人に毛が生えた程度でしかないのは判っているけども、そのことを考えるとなかなか床につくことができなかった。

そして、フリーマーケットの当日がやってきた。

僕の出展する場所は、通路と通路が交差する人が集まりやすい場所で、ここで手にとってもらえなかったら終わりだと感じた。とはいえ、売るためよりも相手に着てもらうことの方が重要なので、値段は原価かそれに少し色を付けた程度に設定して置いた。

しかし、フリーマーケットというのは、どうしてもこんなにも物が安いのだろうか。

明らかに原価割れしているようなものでも、当然のように値札が貼られている。それはお古であったり、要らなくなったりしたものだからなのだろうけど、勿体ないとは思わないのだろうか。こう考えるのは僕が貧乏性だろう。僕の作品の武器は品質しかない、と心の中で呟いた。

場所が場所だからだろうか、意外に人は立ち止まって見てくれた。中には、自分で服を作っている人がいて、こうしたほうがいいよ、



とアドバイスをしてくれた。勿論、周りとは比べると幾分か値段が高いこともあって、値段を安くしてくれという人は多かったけど、僕は快く了承した。

終了時間に近づく頃には、残り数着といった程度しか残ってなく、これは大成功といってもいいだろう。顔をにやつかせながら、片づけの用意を始めようと下を向いたとき、女性の声が頭の上から聞こえてきた。

「あー。もしもし」

顔を上げるとそこには、パンクとピンクハウスを混ぜ合わせたような見たこともない恰好をした女性が立っていた。

「もしかして同じ学校の人だったりする？」

彼女が言った大学の名前は、僕と同じ学校だった。

「はっはっは。やっぱりねー。そうだと思ったよ。見たこともないブランドマークをつけた人って記憶していたから、たぶんそうじゃないかなーと」

僕は冗談で、自分が着ることを前提とした洋服に自分のイニシャルをかたどったマークをつけていた。そうすると、なんとなくだけど、自分が作ったぞって自己主張できたから。しかし、まさかそれを見ている人がいるとは思わなかった。自分が変なところで優越感を抱いていることを見られた気がして、凄く恥ずかしくなった。

「しっかしまー。他人に近いとはいえ、多少でも知っている人のお古の服って買う気にはなれないねー。そのシャツとか、結構いいん

「だけど」

彼女は、目を細めながら、僕の作ったシャツを手にしてそう言った。少なくとも、その恰好には似合わないだろと思ったが、口には出さなかった。

「いいや。それは、自分で作ったのだから、誰も着てないから平気だよ」

「へー。凄いじゃん。男のクセに服なんて作れるんだ。私なんて、料理もできないよ」

彼女は驚きましたというリアクションを、両手でオーバーなくらいに見せた。

「僕だって、料理はそんなに上手くないよ」

「んんー。そんなものなのかな。なんとなく、お母さんの仕事って感じだから、同じ様なものだと思っていたよ」

彼女はにつこり笑って、持っていたシャツを僕の前に突き出した。

「いくらっ」

値段を提示すると、ちよっと高いねーと言いながらも、値切ることなくその通りにお金を出した。

「やっぱり、昔からやってた口なん？」

彼女は手提げバックに服を入れながら、そう訊ねてきた。

「いいや。一年くらいから始めたばかり」

「へー。それにしちゃー巧いね。尊敬、尊敬。やっぱり、自分が出  
来ないことを出来る人って素晴らしいね」

「そんなものかな」

「そんなもんでしょ」

彼女は、いいもの買ったよ、と手を振りながら帰っていった。名  
前を聞くのを忘れたけど、もう会うこと無いだろう、そんなことを  
思いながら、初めてのフリーマーケットは終わりを告げた。

僕の予想は次の日に裏切られた。日本文学の講義を受講している  
とき、彼女に出会った。出会ってしまったというの方が適当だろう  
か。

この講義は有名な教授が受け持っている関係か、大学の中でも一、  
二を争うほど大きい部屋で行われている。とはいえ、有名な人だろ  
うと、勉強する気のなく講義を受けている人がやっぱりいて、やる  
気のある人間とない人間とは席の間に見えない線が引かれているか  
のように、真ん中はいつも空いていた。

僕はというと、いつもならばやる気のある人間に属していたのだ  
けど、前の晩、あるインスピレーションが浮かんだデザインの服を、  
徹夜をして作っていたために遅刻してしまったので、場所が無くな  
っていた。空いている真ん中に座るといのは結構恥ずかしいもの  
があつて躊躇したが、教室に入ってしまったのを引き返す方が滑稽  
だったので、邪魔にならないようにこっそりと席に着いた。

そこに彼女が座っていた。彼女の恰好は、前に見たサイケデリッ  
クな恰好から一転してフォーマルなものであった。それだから初め  
は気がつかなかったのだけど、講義の途中、黒板に書かれている文  
字をカメラで写し始めるという妙な行動を始めたので、気になつて  
横を向くと彼女であることに気づいたというわけだ。

「あれ、あんたは」

彼女も気づいたらしく、僕は小さく会釈した。

「いやだなあ。なんでこんな時にいるのよ」

なんのことだか判らなかつたけど、すぐに合点がいった。フォーマルな恰好をしていると思っただけど、中に着ているシャツは僕の仕事だったものだった。

「似合っているからいいんじゃないの」

「それは、皮肉？ それとも自惚れ？」

「いいや、両方」

あんたねえ、と頬を膨らませながらも目は笑っていた。その時、教授が黒板に書いてある内容を消して、新しいことを書き始めたので、一時彼女を無視するようになかたちとなった。彼女はというと、なにをするわけでもなく、目を細めながら黒板が書き終わるのを待っているように見えた。

「書かなくても大丈夫なの？」

「これがあるからね」

先程使っていたカメラを僕の目の前に出した。よく見ると、ファインダーの下に、液晶モニターがついていて、それがデジタルカメラであることがわかった。

「結局、ノートに書くことになるんだろっから、あんまり意味ないんじゃない？」

「それもあるんだけどね。わたし、目が悪いんだ。一番前にいてもうつすらとしか黒板の文字が見えなくてね」。高校時代は、教科書

の内容をひたすらなぞるだけだから問題なかったんだけど、大学に入ったら、いやはや。困ったものよ。だから、暫定案としてカメラを使うことにしたわけ」

とんでもない思考の飛び方だった。考えてみると、初めてあったときも衝撃的だったし、寧ろ彼女らしいかもしれない。

「眼鏡とかコンタクトとか使う気にはならないの？」

「まさか。あんなの邪道だよ」

「眼鏡会社に恨みでもあるの？」

「質問ばかりされてるなあ」

「前は、僕の方が質問されていました」

人の揚げ足をとるなんて人間出来てないぞ、と言いつつも、彼女は話し始めた。講義は、彼女の話をも邪魔する雑音でしかなかった。

「単純な話よ。眼鏡をつけたまま事故に遭って、その割れたレンズが眼球を突き刺さって失明をした兄弟がいたから。それだけ。だって、滑稽じゃない？ 視力が低下したから眼鏡をつけているのに、そのせいで目が見えなくなっただけのもの」

「気持ち判らなくもないけど、事故に遭い、その上で失明するなんて確率かなり低いと思うけど」

「ま、それもそうなんだけどね。けども、わたしは駄目。一度、間近で見ちゃったからね。目から血をダラダラ流すところを。気分はスプラッターって感じよ」

彼女は冗談を交えながら話していたが、その記憶は今でも心に焼き付いているのだろう。もし、兄がそういう状態になったら、どうなのだろう。幾ら考えたところで想像つかなかった。愛情が足りないのだろうか。

「ま、気にしなくていいってことよ。潰れたのが片目だしね。普通に生活するだけなら問題なし。当事者なんて気にしていないのか、今も眼鏡をつけているしね。わたしがトラウマに感じているのをなんだと思ってるんだ」

「そういうものかな」

「そういうもんでしょ」

二人して笑った。

「この後、暇？」

その後、チャイムが鳴るまで話し続けていた。彼女が手荷物を整理し始めて、帰ってしまうと思った僕は、少しだけ勇気を振り絞って訊ねてみた。

殆ど初対面と同じ様なものだから断られるかなと思ったけど、「それってデートのお誘い？」って試すような目で僕を見た。

「この後、一つ講義があるから、一時間半後、校門で会いましょう。あー、あんたは家近い？ だったら、洋服持ってきてくれないかな？ この前、あんまり服がなかったからもつと見てみたいのよねー。そんなわけでよろしく」

彼女はそういって、教室から出ていった。

本当は僕も講義があつて、サボるつもりで声をかけたんだけど、まあいいやと呟いて、僕は一度家に戻った。彼女に合うような服があればいいんだけどな、と頭の中で部屋にある洋服を思い浮かべた。三十分あれば往復できるような距離に家はあつたけど、服を選んでいる内に、時間を忘れてしまったらしく、時計を見ると約束の時間を過ぎていることに気がついた。遅刻してしまった。彼女はもう

いないかもしれないと焦りながら、飛び出すように僕は家を出た。  
校門前に息を激しく吐き出しながら辿り着くと、彼女が扉に寄り  
かかりながら、退屈そうに待っていた。

「ごめん。家で服を」

僕の台詞を覆い隠すように、彼女は手を突き出した。

「言い訳は結構。ごめんって謝れば十分。ま、服を持ってきてって  
頼んだのはわたしだしね。責任を感じて走ってきたんだから、むし  
ろわたしの方がありがとうを言わないといけない立場っしょ」

彼女は頭を下げながら、ありがとと言った。僕はどうしたらいい  
のか判らず、こちらこそと、訳も判らず頭を下げた。

「考えてみれば、わたしがあなたの家に行けば、こんな問題になか  
らなかったのよね。ま、過ぎたことはいいか」

彼女はブツブツと独り言を呟くと、感銘を得たように指をパチン  
と鳴らした。

「今からうちにご招待するわ」

僕が答えるのを待たずに彼女は歩き出した。

まあいいか、そう思って、彼女の後ろを追いかけるように、僕は  
ついていった。

その途中、スーパーマーケットに寄ると、彼女は日用雑貨を中心  
として、無作為に買い物カゴに入れているようみ僕は見えた。

「なに買っているの？」

「この後、本場のカレーを食べさせてあげようと思ってね。その材料を選んでいるのよ」

そう答えながら彼女は牛乳石鹸をカゴに入れた。

「この石鹸も入れるつもり？」

彼女は少し思案した面もちで僕の顔を見つめ、

「まあ、来てのお楽しみつてところよ」

と、笑うだけだった。

買い物が終わわり、僕たちは細い道を縫うように歩いていた。その間、この材料で彼女が本当にカレーを作るのかが気になって、彼女が話しかける内容を半分くらい聞き流していた。

到着と、彼女は立ち止まり、僕はその建物を見上げた。どうひいき目に見ても、建築うん十年前の木造のもので、台風でも来れば吹き飛んでしまいそうな気がした。

「ボロいっしょ」

沈黙で答えるしかなかった僕の心境を察したのか、彼女は、大丈夫。伊達に戦後から建っていないわよと、さらに心配させるようなことを言った。

その家の玄関を開けると、靴箱があっってお世辞にも綺麗とはいえない靴が押し入れられていた。一人で暮らすには大きすぎたので、オートロック抜きのエントランスなんだろうと横文字で解釈してみた。

彼女は靴と共に靴下を脱いでから上がって、僕に彼女のだと思われる薄いピンクのスリッパを渡した。



「スリッパ、一足しかないからこれでガマンしてね」

女性が裸足で、男がスリッパを履くというのは問題あるだろうと思つて抗議してみたが、彼女は軽くその意見を一蹴した。

「そういう男女差別は嫌いだし、お客様なんだから気にしちゃ駄目」

巧く言い返す言葉が見つからなかったので、しぶしぶスリッパに足を通した。少し小さかった。

二人で階段を上る途中、向かつて歩いてくる色黒な男性が彼女に英語で話しかけてきた。彼女も慣れたように英語で返しているのは判るのだけど、何を言っているのか半分も聞き取れなかった。

「彼は同じ場所に住んでいる人なの？」

「いや、一応ここの建物は女性オンリーだから、男性は住んでいないの。彼は、わたしの隣に住んでいる人の彼氏。女性寮みたいに男子禁制つてわけじゃないから、ちよくちよう遊びに来ては、ダンスをして帰っていくんだけどね」

「ダンス？ こんな場所です？」

「少しでもお金払えば、こんな殺風景な場所でロマンに浸らなくても済むのにねえ」

意味を理解したけど、その会話をするには恥ずかしかったので聞かなかつたことにした。

「やっぱり、彼女も外国人なわけ？」

「両方ともね。たしか、インド人じゃなかったかな？」

「なら、どうして英語なの？」

「共用語が多すぎるから英語の方が相手に伝わりやすいからでしょ。」

でも、二人の文法はめちゃくちゃだけどね」

階段から数えて二つ目のドアに立ち止まって、彼女は口を開いた。

「わたしの部屋、少し散らかっているの。って言いたいところだけど、無理なのよねえ」

部屋の中を見て納得した。見慣れた四畳半の部屋なのだけど、間取りはないのに広く感じるのは、何も物がなからだろう。テレビすらなく、あるのは小さな本棚と机だけ。僕も引越した当時は、自分の部屋は閑散としていたと思ったが彼女はそれ以上だった。

「ちょっと待っていて」

そう言って彼女では部屋から出ていった。手持ちぶさたに感じた僕は、何もない彼女の部屋を見ていることにした。

デジカメを使っているくらいだから、パソコンくらいはあるだろうと見える程度で探してみたけれど何処にもない。というか、この建物の中にパソコンがあるということがとうてい信じられず、勘違いしたのかもしれないと両手を畳みにつけて、背伸びするように天井を見上げた。

彼女が戻ってきたので聞いてみると、学校のパソコンに繋げてプリントアウトすれば用は足りるから問題ないらしい。そういうものなのだろうか。

「じゃ、持ってきた服を見せてよ」

僕は鞆から遅刻するほど考えて厳選した服を取り出して彼女の前に並べた。

本当ならば、女性用のものもあればよいのだけれど、元々自分が

着るために作っていたものだし、仮にスカートを作った所で、サイズを測らせてくれる女性はいなかったので作りようがなかった。それでも彼女は喜びながら僕の服を一つ一つ手にとってでは自分に合わせた。

「これとかいいんじゃないの？」

それは、昨日から今日にかけて作っていたブレザーだった。配色は冒険したもので、ちよつとばかり派手に作られている。

「それ、一番の新作なんだ」

本当のことをいうと、彼女をイメージして作った物だったので、彼女が気に入ってくれたことがとても嬉しかった。

「サイズもちよつと大きいけどぴったり。これ、売ってくれないかな？」

「いいよ、あげる」

「えーでも」

「カレーを作ってくれるんでしょ？ それでおあいこということでいいじゃない」

彼女はちよつとばつの悪い表情を浮かべた。何でだろうと思っっていると、ドアを叩く音が聞こえた。

「あれ、誰か来たよ」

「ちよ、ちよつと待って」

彼女は立ちあがって、ドアを小さく開けた。まるで僕にその人を見せないようにしているように感じたけど、それは考えすぎだろう

か。そのドアの隙間から美味しそうな匂いが漂ってきて、僕のお腹は小さく鳴った。

「これって、カレー？」

「あーもう。ばれちゃしょうがないなあ」

彼女は諦めたような口調で、ドアを完全に押し開けると、カレーの匂いとともに、色黒の女性がそこに立っていた。

「さつきも言ったでしょ。隣に住んでいる人よ」

彼女は、サンキューと言って先程買ったものを渡すと、手を振ってドアを閉めた。

「本場のカレーを食べさせるには、やっぱり本場に住んでいた人に作らせるのが一番だしねー」

お鍋と何かが入ったビニール袋を持ちながら彼女は、独り言のように言った。

「ま、そういうことで」

テーブルの上に、ドンと鍋を置いた。

「これって、どうやって食べるの？」

彼女の手料理が食べられないことは残念だったけど、目の前のカレーでお腹を満たせばいいと思った。しかし、ご飯が容易さされていないので、食べることができない。どうしたらいいのだろうか。

「あーこれに載せて食べるのよ」

別に持っていたビニール袋から、厚いパン生地のようなものを取り出した。

「なんなの、これ？」

「ナンのの、これ」

ギャグを言ったつもりなのか、彼女は一人で笑っていた。こういうギャグは合わせて笑うことが出来ないので辛い。寒い空気に察したのか、彼女は言葉を紡いだ。

「あちらの人は、ナンっていう小麦粉で作ったものに載せて食べるのよ。お米も食べないわけじゃないから勘違いしないでね」

そういって、ナンにカレーを載せて僕に手渡した。彼女も載せ終わるのを見届けると、頂きますといってかぶりついた。

本場のカレーというのは、少し粉っぽくて、いつも食べているのと味も違うせいか、正直美味しいとは思えなかった。

「どう、美味しい？」

どう言ったらいいものかと、噛んでいる振りをしながら考えた末、美味しいよと、当たり障りないように言っただけだった。しかし、彼女は吃驚した顔をして、

「本当に美味しいの？ わたしは食べて慣れてるとはいえ、あんまり美味しいとは思えないのよね」

と僕の顔を見つめた。その瞳から、本当のことを言いなさいと攻

められているような気がしたので、正直に言い直した。

「やっぱりねえ。日本人には本場のカレーが合わないのか、彼女の料理が下手なのか」

「前者だったら、昔の人はこれを手本にして今の日本風のカレーを作ったんだし、基本的に日本人に合っていたというのが正解なのかな」

「ううん。日本のカレーはイギリスから輸入されてきたものだから、昔の人は本場のカレーなんなんて食べたこと無かったと思うよ」

その後も彼女のちよつとした蘊蓄を交わしながら、僕たちはナンが尽きるまで食べ続けていた。

「もう、お腹一杯。動けないわあ」

彼女はそう言ったかと思うと、突然、外に出ていこうと声をあげた。

「折角、洋服をもらったんだしね」

着替えるから外で待っていると、僕を部屋から追い出した。

待つこと数分、彼女は僕の作った服を着て現れた。「やっぱり、恥ずかしかつたなあ」という彼女の表情はとても綺麗に感じた。

ふと、彼女のことを写真に撮りたくなった。

カメラを持っていない僕は、人差し指と親指で鉄砲の形にして、両手で指が辺になるように合わせて四角を作る。その中に、彼女が入るように手を伸ばして、心の中でカチツとシャッターを押した。するとストロボがたかれたように、光が包み込んだ、そんな気がした。

いつからそう感じていたのか判らない。この時は、すでに僕は彼

女に完全にいかれたことを自分でも判った。

彼女の事を知りたい。そう思うと、口が勝手に動き出した。

「そつえば、君の名前はなんていうの？」

(後書き)

読んでくれてありがとうございます。  
主人公の名前は自由に決めてください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1587o/>

---

ストロボ

2010年10月13日13時20分発行